

## 前期：現代キリスト教思想研究1——近代から現代へ

オリエンテーション——現代キリスト教思想の諸動向

1. 西欧近代とキリスト教 4/18
2. 自由主義神学1——シュライアマハー 4/25
3. 自由主義神学2——リッチェルとハルナック 5/9
4. 自由主義神学3——トレルチ 5/16
5. ヘーゲルとヘーゲル主義 5/23
6. 近代聖書学と宗教史学派 5/30
7. キリスト教と社会主義 6/6
8. 弁証法神学1——バルト 6/13
9. 弁証法神学2——ブルトマン 6/20
10. 弁証法神学3——ティリッヒ 6/27
11. 解釈学的神学とブルトマン学派 7/4
12. 研究発表 7/11
13. 研究発表 7/18
14. 研究発表 7/25

### <現代キリスト教思想の諸動向>

#### (1) 問題領域：諸学問の相互連関の構成する知的世界

キリスト教思想を「神学」あるいはさらに「組織神学」に限定することは非現実的・抽象的。

1. キリスト教思想と神学→「神学」よりも広めに問題領域を設定する。  
特に、哲学あるいは現代思想を意識する。
2. 神学諸学と組織神学→「組織神学」を軸にして、キリスト教倫理や文化論、倫理学、  
として聖書学など。
3. ティリッヒ『キリスト教思想史』別巻二・三、白水社。
4. バルト『十九世紀のプロテスタント神学』上中下、新教出版社。

#### (2) 時代区分：いつから現代か？

5. 時代区分という問題
  - ・ 解釈者の視点、問題設定に依存する。→「神学において」、現代はいつからか。
  - ・ 仮説性
  - ・ 複数のメルクマールを組み合わせる事
6. 第一次世界大戦以降（1920年代以降）という時代区分  
1960年代半ばで、次の時代区分が設定できる。
7. 現代は、「近代」か？ あるいは「ポスト近代」か？
8. そもそも「近代」とは何か？

#### (3) 諸動向

9. 諸動向の枠組み → 思想のグローバル化とは何か。思想を規定する諸要因。  
思想史と社会史

- ・ 教派
- ・ 地域あるいは文化圏
- ・ 思想史の諸潮流（類型）

## 10. 注意点

- ・ドイツの位置づけ：ドイツ中心的なキリスト教思想史の叙述の必然性と限界（功罪）  
19世紀から20世紀前半までのドイツ神学とその後。
- ・リベラルなキリスト教思想に偏った叙述は、それほど正当化可能か。
- ・解釈者の視点、問題意識の問題性→共通の認識をどの程度まで、どのレベルで確保できるのか。学会あるいは研究会の意義。

## 1. 西欧近代とキリスト教

### (1) ヨーロッパ文明の基盤—ヘレニズムとヘブライズム—

1. 古代ギリシャ・ローマ文化（政治・経済・文芸）＋キリスト教（一神教）  
これら二つの伝統・潮流の動的な相互作用の中から、「ヨーロッパ世界」が出現した。  
↓
2. ヨーロッパをその基礎にある動向・潮流・伝統の多元性において捉えようとする議論。その一つとしての「ヘブライズムとヘレニズム」という図式。  
その変形
  - ・ルネサンスと宗教改革
  - ・キリスト教とヒューマニズム
3. 「われわれが示しうることは、たしかにドイツの宗教改革とイタリアのルネサンスとの間に存する個々の具体的対立を通じてなにか典型的な対立が存在しているという認識である。それはヨーロッパ的生を貫く根源的対立にほかならぬのであって、この根源的対立こそは、たえず新しい形式をとって現れながら回帰するものであり、ヨーロッパ的生のなかにどんな新しい実際的大問題が立ち現れようとも決して除去されることはないのである。それはわれわれのヨーロッパ世界が二重の源泉から成立していることにもとづく対立、つまり予言者的・キリスト教的な宗教世界からと古代の精神文化からとに由来する根源的対立なのである。この対立は決して排他的ではない。」（トレルチ、74頁）
4. 「このように、ヨーロッパの文化や思想、ひいては世界観を、ダンテとゲーテという二人の人物においてそれぞれ典型的にあらわれている、ユダヤ的・キリスト教的なものとしての「ヘブライズム」(Hebraism)と、ギリシア的なものとしての「ヘレニズム」(Hellenism)という二つの類型によって把握し、理解しようとすることは、十九世紀以来一般に広まったやり方であった。その普及に与って力があつたのは、英国の文芸批評家マッシュュー＝アーノルド(M. Arnold, 1822-88)である。」（水垣、24頁）
5. 「文化は宗教の形式(Form)であり、宗教は文化の内実(Gehalt)である。」（ティリッヒ「文化の神学」）
6. 宗教1（文化の内実としての宗教）→ 宗教文化（宗教2）  
↓ ↑ 協調・対立  
→ 世俗文化
7. 宗教と文化の二重の関係（あるいは、教会的キリスト教とキリスト教的文化）  
法：教会法／世俗法、バッハ：教会音楽／世俗音楽、  
遠藤周作：テーマとしてのキリスト教（キリスト教作家）／狐狸庵先生（随筆作家）

## 8. 二重性の顕在化としての啓蒙主義：17世紀までと18世紀以降

古プロテスタンティズム、新プロテスタンティズム

・自然神学的な絆（自然法を含む）の解体

→ 自律思想と伝統（他律）の対立

## 9. その後の近代西欧

・19世紀：個・意識の明晰・明証性からその前提（不透明な）へ

・20世紀：非西欧的なものによる西欧の相対化、多元性の意識

→ 宗教の神学

**（2）近代合理主義 1**

10. 近代科学（啓蒙的な実証主義的科学）、一次元的な還元主義

ニュートン（17世紀）からニュートン主義へ（18世紀）

11. 魔女裁判の意味

12. 機械論的世界観への適応の試み：

理神論、合理主義的キリスト教→伝統の解体（神秘なしのキリスト教）

13. 合理性とは何か、合理性は単一か。rational と reasonable。

体系とは、真理とは何か。

・対象との適切な連関と知的世界の整合性

前者：固有性（実在論的）→ 弁証法神学

後者：共通性（形式的）→ 自由主義神学

予定調和？ ほんとうに？

**（3）近代合理主義 2**

14. 自然主義と歴史主義→ドイツ古典哲学の課題、近代と伝統との調停

自然主義と超自然主義という図式の成立

15. 自然神学の解体とその帰結、再度自然神学の構築へ

**<文献・参考文献>**

1. トレルチ『ルネサンスと宗教改革』岩波文庫。  
『トレルチ著作集』ヨルダン社。
2. ティリッヒ『ティリッヒ著作集』白水社。
3. 水垣渉「ヘブライズム・ヘレニズム・キリスト教」（武藤一雄・平石善司編  
『キリスト教を学ぶひとのために』世界思想社、24-34頁）。
4. 芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房。
5. ブライアン・イーズリー『魔女狩り 対 新哲学』平凡社。
6. フランク・E・マニユエル『ニュートンの宗教』法政大学出版社。
7. ジョン・トーランド『秘義なきキリスト教』法政大学出版社。
8. 大津真作『啓蒙主義の境界への旅』世界思想社。
9. 加藤節『ジョン・ロックの思想世界』東京大学出版会。
10. デイヴィッド・ヒューム『自然宗教に関する対話』法政大学出版社。